

「おめでとうございます。あなたはこのたび、アドルフ・エリオット殿下の正式なる妃として迎え入れられることとなりました」

城下町にある宿屋で働いていたわたしに、突然現れた侍女がそう告げたことはまだ記憶に新しい。

理由もなにもわからないまま王宮へと連れて来られたわたしは、そこでエルシアン王国の第一王子——アドルフ殿下と出会った。

アドルフ殿下はエルシアン王国の第一王子でありながら、魔獣討伐部隊の部隊長を務める実力の持ち主で国民からの人気も高い。特に女性からの人気は絶大で、祭典が行われた際には宿屋が他国からの女性観光客で満室になるほどだった。

けれど、実際に本人を目の前にしてその人気も頷けた。

サラサラとした絹のような色素の薄い金髪に、エメラルドのような翠色の瞳。まるで人形のように美しい人だったのだ。

（なんでこうなったんだろう……今でも信じられないや……）

本日の妃教育が終わり、夕陽の差し込む部屋で本を読みながら侍女に淹れてもらった高級な香りのする紅茶に口をつける。傍らにはわたしの世話をしてくれる侍女がいて少しそわそわとするけれど、気を遣わせまいとする彼女たちのおかげでそれにもだいい慣れてきた。

アドルフ殿下の正式な妃として王宮に迎え入れられてから、宿屋にいたころでは考えられない暮らしをさせてもらっている。毎日わたしのために仕立ててもらった綺麗なドレスを着て、身だしなみや身の回りのお世話は全部侍女がやってくれて、栄養バランスの整ったおいしいごはんとお茶の時間つきだ。妃教育は受けているけれど厳しくされることもなく、無理のない範囲で優しく教えてもらっている。

両親が亡くなったあとにそれまで会ったこともなかった叔母に引き取られ、叔母が経営していた宿屋で働かされていたところがなんだかもう遠い昔のことのように思える。叔母とその息子はわたしのことがひどく目障りだったようで、侍女が迎えに来たときは「なんでおまえが」と罵られたけれど、持参金を見たら追い出すようにわたしを王宮へ向かわせた。

本から目線を上げてぼんやりそんなことを思い出していると、部屋の扉が開けられる。扉から姿を現したのは、アドルフ・エリオット殿下その人だった。

「で、殿下……！」

魔獣討伐任務のために朝早く出て行かれたから、今日は会えないと思っていたのに。そう思い驚いて立ち上がると、さりげなく侍女が部屋から出て行くのが見えた。アドルフ殿下は微笑みを浮かべてこちらに近づいてくると、慣れた仕草でわたしの髪をそっと掬い上げた。

「アドルフでいいって言ってるのに」

エメラルド色の瞳が優しく細められ髪にキスを落とされると、どきりと胸が高鳴ってしまう。

「ア、アドルフ様……」

繰り返すように呟くと、アドルフ様の瞳がこちらを向いた。そのエメラルド色の瞳に近い距離で見つめられると、未だに緊張してしまう。

「ご無事でなによりです……」

ごくりと生唾を飲み込んでからそう言って、耐えきれなくて思わず目線を逸らした。

「き、今日はもう会えないと思っていました……」

「うん。僕もそう思っていたんだけど、思ったよりも早く片付いたんだ。リリアに会いたくて、急いで帰ってきたんだよ」

優しい声音で続けられた言葉が嬉しくて、ちらとアドルフ様を見上げる。すると愛おしいものでも見るかのような目でこちらを見ていたから、今度は近い距離でも逸らすことができなかった。

「ただいま、リリア」

「……おかえりなさい、アドルフ様」

そう返すと、唇にキスが降ってくる。やわらかい唇が気持ちよくてうっとり目を瞑ると、舌で唇を甘く吸われた。

「ん……」

それにそつと唇を開くとアドルフ様の舌が口の中に入ってきて、舌を絡められる。熱い舌を絡められていると、まるでとろけてしまいそうで気持ちいい。

何度も角度を変えて深くなっていくキスに夢中になっていたら、いつのまにかアドルフ様の指がドレスを脱がしていく。一人で着るのは難しいドレスだったのに簡単に脱がされてしまうと、ドレスが重力に従って床に落ちてしまう。せっかく仕立ててもらったドレスが落ちてしまったことに一瞬気を取られると、まるでそれを咎めるみたいにアドルフ様の指が、つう……っ♡と首筋をなぞった。

「ん……っ♡」

唇を塞がれながらも、その感覚に甘い息が漏れてしまった。これから起こることに期待するように、お腹の奥が熱くなる。けれど、僅かばかり残っていた理性が頭を掠めて、唇が離れた拍子に口を開いた。

「ま、待ってください、アドルフさま……まだお風呂にも入っていないのに……♡」

熱い吐息を漏らしながらアドルフ様を見上げれば、その瞳は熱を帯びていて、それにまた胸の奥がきゅうっと締めつけられる。

「ダメ？　こうしてリリアに触れたいのを、今日一日ずっと我慢していたのに」

「だ、だめというわけじゃ……んう♡」

アドルフ様はまるで言葉を遮るように、ちゅう♡　とわたしの首筋に唇を押し当てた。それに体がビクッ♡　と震えながらも受け入れてしまっていると、背に手を回されてコルセットを脱がされる。胸元まで覆う形状のコルセットが外されて、胸がぷるん♡　と露わになった。

「あっ♡　アドルフ、さまぁ……♡」

ちゅう♡　ちゅう♡　と首筋に吸いつかれながら、胸の頂点の周りを円を描くように、すり♡　すり♡　と指で撫でられた。もどかしいその感覚に腰が揺れて、もっともっ♡　というようにおっぱいを前に突き出してしまふ。

「ふふ……リリア、腰がへこへこ動いてるよ。まだここ……乳首にも触っていないのに、こんなに固く期待勃ちしてる……リリアはこんなにエッチなのに、気持ちいいの我慢できるの？」

「は、あ……♡　で、できませんん……♡　アドルフ……さまぁ……♡」

乳首に触れそうで触れないその指先がもどかしくて熱のこもった目で見上げると、アドルフ様はふ、と笑みを零した。そして、それまで乳首の周りを撫でただけだったその指先が、ぐに♡ と乳首を押し込むように触れる。

「あっ♡」

ずっとほしかった刺激を与えられて、背中を反らせながらその快感を受け止めた。アドルフ様の指はそのままわたしの乳首を二本の指で挟むように、ぐに♡ 摘んだり、ぎゅっ♡ と押し込んだり、交互に快感を与え続ける。

「ふっ……んん♡ あ、あっ……♡ きもち、きもちいです……アドルフさまあ……♡」

「うん。気持ちよくなってるリア、とってもかわいいよ。もっと気持ちよくなろうね」

「あっ、んう♡」

アドルフ様が固く勃起上がった乳首を食むように口に含む。れろれろ♡ と口に含まれた乳首を舐められると、ざらざらとした舌の感触が指とは違う快感を与えてきて、頭がびりびりと痺れた。

片方の乳首はくにくに♡ と摘まれて、もう片方の乳首はれろれろ♡ と舐められて、心地よい快感に目を瞑って浸っていると、急にそれは激しい刺激へと変わる。

「あつ、あ♡ 吸うの、あっ♡ カリカリも、んう♡ だ、だめえ……だめですっ♡ ひう♡」

それまで摘まれていた乳首は中をほじくるようにカリカリ♡ と爪で引っつかかれ、舐められていた乳首はぢゅるる♡ とアドルフ様の唇に吸われてしまふ。突然訪れた激しい快感にお腹の奥が熱くなって、すぐに絶頂感が込み上げてくる。

「っひ♡ あ、アドルフ、さまっ♡ も、だめ、だめですっ、それっ♡ あ、あ……っ♡ りりりっ♡」

絶頂感が昇り詰めると、腰がビクビク♡ と激しく揺れた。力が抜けて、アドルフ様の体にもたれかかってしまう。快感の余韻に浸るように、はっ♡ はっ♡ と肩で呼吸していると、乳首から口を離れたアドルフ様が顔を上げた。



「リリア、気持ちよくなるのが上手になったね。とてもえらいよ」

「あ、アドルフ……さま……♡」

褒めるように頭を優しく撫でられると、気持ちよくてうっとりしてしまふ。

けれど、「だけど……」と続けるアドルフ様の目がずっと少し細められるのを見て、きゅっ♡とお股の奥が締めつけられる感覚がした。

「さっきみたいなきは、なんて言うって教えたっけ？」

「あっ……♡」

折り曲げられた指が、アドルフ様から教わったわたしの一番弱い部分——クリトリスに触れる。もうそれはショーツの上からでも簡単に場所がわかるくらいに勃起上がっていて、第二関節でコリッ♡と刺激されると、ビクッ♡と大きく腰が揺れてしまふ。

「ね、リリア。『だめ』じゃないね？　なんて言うのか、教えて？」

「あ、あっ♡　イっ……♡　イクっ♡　イクって……言いますっ♡

んっ、う……♡」

「うん、ちゃんと覚えていていい子だね。じゃあ次は、早く触ってほしいように勃ち上がってる、リリアのこのエッチなクリトリスでイこうか」

「あぁっ♡」

アドルフ様の指がショーツを下ろして直接クリトリスに触れると、気持ちよさの余りはしたくない声を上げてしまう。愛液でぬるぬる♡ したおまんこの割れ目からクリトリスまでをなぞるように指を滑らせると、愛液を塗りたくられたクリトリスを、ぬちゅぬちゅ♡ と撫でられた。

「エッチな音……リリア、聞こえる？ すごいたくさん溢れちゃってるね」

「んっ……あっ♡ あ、アドルフ、さまが……っ♡ きもちよく、する、か

ら……あぁんっ♡」

「ふふ……かわいいね」

目を細めて少し笑ったアドルフ様の顔が見えると、快感も相俟ってふわふわした心地になった。そのままアドルフ様の唇がわたしの唇と重ねられて、舌が口の中に入ってくる。くちゅ♡ くちゅ♡ と唾液が絡み合う音と一っしょに舌を絡められて、快感に腰がビクビク♡ と震えた。

(舌吸われるのすき♡ 気持ちいい……♡ あ♡ クリ、裏筋から撫でられたら  
すぐイっちゃう……♡♡)

やわらかい舌で甘く吸われると、頭の中が真っ白になる。その間もアドルフ様の手は休まることなくずっとクリトリスを刺激し続けていて、裏筋を根本から先端まで、丁寧にぬちゅぬちゅ♡ と撫でていた。真っ白な頭にいやらしい水音だけが響いてくるから、どんどん気持ちいいことしか考えられなくなっていく。

「ん、はあ……ここ、リアの弱いところ……撫でるとどんどんえっちな汁が溢れてくる……。いっぱい撫でてあげようね」

「あっ、お♡ きもちいい、きもちいです……♡ アドルフ、さまあっ♡」

気持ちよさに息を荒げながら縋るようにアドルフ様の名前を呼ぶと、アドルフ様の熱っぽい眼差しがわたしを射抜いた。

「も、イク……イっちゃい、ます……う……っ♡♡ っ♡♡」

「うん。ちゃんと教えてくれていい子だね。このままリアがイってるかわい  
いところ、僕に見せて？」

クリトリスを撫でるアドルフ様の指の動きが速くなっていく。それに合わせるように絶頂感がどんどん昇ってきて、アドルフ様の服を握りしめる手に力が入ってしまう。

「んっ、いっ……っ♡ いっちゃ……あっ♡ で、でちゃっ……っ♡  
っ……っ！♡♡」

ぷしっ♡ しょわわわわ♡

絶頂感とともになにかが出る感覚がして、透明の液体が溢れ出た。

「あ、あ……」

床にシミを作ったそれに驚いて、涙が滲みながら思わずアドルフ様を見上げる。珍しく驚いた様子のアドルフ様にショックで声を失っていると、次の瞬間アドルフ様がわたしの膝裏に手を差し入れた。そしてそのままアドルフ様がわたしを抱き上げると、隣の寝室にあるベッドにそっと寝かせられる。

「あ、アドルフさま……っ？♡」

突然ベッドに連れられたことに目を瞬かせると、アドルフ様はわたしの足元に腰を下ろしてジャケットを脱いでから、する……つとわたしの髪の毛を梳くように撫でた。

「リリア、驚いたね。でも大丈夫。あれは潮吹きと言って、リリアがとても気持ちよくなった証だからね」

「し、潮吹き……？」

「そう。でも、ここが濡れてしまったから……」

「っひ……♡」

アドルフ様が言いながら指をわたしのおまんこに添えたかと思ったら、わたしの足を左右に大きく開いてそのままそこに顔を埋める。

「きゃ……っ♡ アドルフ様、だめです、そんなところ……あぁっ♡」

おまんこに熱い吐息がかかり、熱を持ったやわらかなものが這わされたことで理解する。

（アドルフ様に、おまんこ舐められちゃってる……♡♡）

「ん、はあ……リリアのおまんこ、ちゃんときれいにしてあげようね……」

「あ、ああっ♡ だめえっ、そんな、とこ……舐めちゃ……っ♡ つひ、ぐう  
~~~~♡~~~~♡」

舌を這わせられるたびに、ぴちゃぴちゃ♡ と愛液と唾液の混じった水音が聞こえる。力の入らない足をどうにか閉じようとしてみたけれど、クリトリスをれる♡ と舐められたことで力が抜けて、どうすることもできなかった。

「ん、ふふ……ここ、気持ちいいね……クリトリスがひくひくしてる……」

「や、あ……♡ つぐう……♡ ~~~♡」

ちゅう♡ とクリトリスに口付けられて、れろれろ♡ と舌で舐めまわされると、快感で頭に火花が飛び散る。恥ずかしくて、アドルフ様にそんなところを舐めさせているのも気が咎めるのに、気持ちよすぎではしたくない声を出すことしかできない。

「はあ……本当はね……ん、もっとはやく……こうして舐めてあげたかったんだ……リリアが……怖がるかと思ったけど……気持ちよくなってきて、よかった……」

「ぐっ……あ、あっ♡ アド、ルフ……さまあ……っ♡♡」

アドルフ様が口を開くたびに熱い息がおまんこにかかって、そのたびに腰が揺れてしまう。れろれろ♡ ちゅこちゅこ♡ とクリトリスを舐めたり軽く吸い上げたりされるのが気持ちよくて、絶頂感がどんどん昇り詰めていく。

「うっ、ん……あぁっ♡ アドルフ、さまぁ……も、いつ……♡♡♡」

「ん……いいよ、リリア……」

手元にあった毛布を強く握り締めると、その手を上からアドルフ様の手が覆う。そして導かれるように手を取られると、指を絡めて握ってくれたから、思わずその手を強く握ってしまった。

ちゅこちゅこちゅこ♡ アドルフ様の口がクリトリスを吸い上げて一定の刺激を与えてくる。頭の中が真っ白になって、どんどん絶頂感が昇ってくると、それがぱちんっ♡ と弾けた。

「イ、くっ……♡♡♡ つ……！♡♡♡」

ビクッ♡ ビクビクビクッ♡

ぷしゅっ♡ しよわわ……♡

腰が大きく跳ねて絶頂を迎えるのと同時に、再び潮を吹いてしまう。快感の余韻に浸りそうになったけれどアドルフ様を汚してしまっていないか気になって起き上がると、アドルフ様が頭を押さえているのが映る。

「あ、アドルフさま……？」

覗き込むとその顔は汚れてはいなかったけれど苦しそうに歪められていたら、不安になりながらも声をかける。アドルフ様はわたしの声に顔を上げると、無理しているような歪んだ顔で微笑んだ。

「大丈夫、なんでもないよ。リリアを気持ちよくさせてあげられてよかった」  
そう言うアドルフ様はわたしの額にキスを落として、先ほどまで着ていたジャケットをわたしに羽織らせる。

「ごめんね、本当はもっといっしょにいたいんだけど……。お風呂の用意を頼んでおくから、それまでここで休んでいて」

「あ……っ」

言うや否やすぐにベッドから立ち上がろうとしたアドルフ様の腕を、反射的に掴んでしまう。振り返ったアドルフ様が申し訳なさそうに眉を下げたのを見



てはつと我に返った。居た堪れなさに目線を落としてしまいながら、小さな声で「ご、ごめんなさい……」と呟く。

「また明日来るよ、リリア」

アドルフ様はそう言うのと、わたしの額にキスをして部屋から出て行ってしまった。



（調子に乗っちゃった……）

その日の夜、夕食のシチューを口に運びながらぼんやりと考える。

アドルフ様とは、太陽が昇っている間——つまり、朝と昼にしか会うことができない。この王宮と渡り廊下で繋がった別塔があり、理由まで聞く勇氣はなかったけれど夜の間はそこで過ごしているらしい。

妃として迎え入れられた際に『正式なる妃』とは言われたけれど、側妃がないとは言われていないので、夜の間はそちらと過ごしているのではないかと

どうしても考えてしまう。そもそも、ただ宿屋で働いていただけのわたしがなぜ妃に迎え入れられたのか、まったく理由がわからないのだ。仮にわたしがたまたま都合がよかったから妃に迎え入れただけなのだとしたら、本命である側妃との時間を邪魔するだなんて、調子に乗るにもほどがある。

(……でもアドルフ様、なんだか具合が悪そうだったな……)

少し歪められたアドルフ様の顔を思い出して眉を寄せていると、わたしの食事の用意をしてくれた侍女たちがなによりそこそと話す声が聞こえてきた。

夕食を食堂で食べることもできるけれど、アドルフ様もいないのでわたしはいつも夕食は自室で取っていた。なので、わたしと侍女たち以外にこの空間では口も軽くなってしまうのだろう。

「ねえ、聞いた？ 今日アドルフ殿下が討伐任務に行かれたとき、獣人が出たんですって！」

「ええっ、そうなの？ 殿下になにもなくてよかったわあ」

『獣人』とは、要するに獣の力を持った種族のことだ。一見人間のようにも見えるけれど、たとえば獣耳や尻尾が生えていたり、体のどこかに獣の特徴

を持っている。気性が荒く力だけでなく魔力も強いことが多いらしく、特にわたしたちのような戦えない人間には恐れられる存在だった。

（獣人、かあ……）

けれどわたしには、あまり獣人を恐れるという感覚がなかった。もちろん戦ったらず間違いなく殺されるから怖くないというのは語弊があるかもしれないけれど、過去に一度獣人に助けてもらったことがあるのだ。

まだ宿屋で働いていたころ、用事を済ませていたら帰りが遅くなってしまったことがあった。はやく帰らないとまた叔母たちに罵られると思い、宿屋への近道だった路地裏を通ったことで運悪く酔っ払いに絡まれてしまった。そこを、ある獣人に助けてもらったのだ。エルシアン王国に獣人がいると聞いたことはないから、外国から来た旅人だったかもしれない。酔っ払いたちはフードを被って獣耳を隠したその人物が獣人だと気がつく、恐ろしそうに悲鳴を上げてすぐに逃げていった。お礼だけは伝えられたけれど、その獣人はすぐにどこかへ行ってしまっただけでその後会うこともできていなかった。

（お名前も聞きそびれてしまったけれど、白銀の髪も碧い瞳も、狼のような黒い耳と尻尾も今もよく覚えてる）

そのときのことを思い出して少し元気を取り戻すと、再び食事に口をつけた。



食事を済ませて今日やることもすべて終わらせてベッドに入ったけれど、その日はなんだかうまく寝つけなかった。夜風にでも当たろうかと部屋から出て歩くと、つついアドルフ様がいる別塔と繋がる渡り廊下まで来てしまう。

「……なにしてるんだろう、わたし」

小さく口にして、ため息を零す。

別塔には立ち入らないでほしいと、妃に迎え入れられたとき一番最初にアドルフ様から言われていた。わたしだけじゃなく、極々限られた一部の侍女以外、ほとんどの侍女たちも立ち入ることができないらしい。

少しの間アドルフ様がいるであろう別塔を見上げていたけれど、もう一度ため息を零してから部屋に戻ろうと踵を返したときのことだった。

塔の方から、なにかを壊すような大きな音が聞こえたのだ。

その音が穏やかではなかったから、脳裏にアドルフ様のことが浮かんで、気がついたらわたしは塔の方へ足を進めていた。

「アドルフ様……？」

そつと様子を伺いながら初めて足を踏み入れた塔の中は、思っていたよりもだいぶ寂しい雰囲気だった。建物自体は豪華な飾りが至るところにあるけれど、それとは不釣り合いに見えるほど家具は少なく、しん……と静まり返った暗がりの塔の中にわたしの小さな声が反響している。

どくりどくりと緊張に高鳴る心臓の音が耳に伝わりながら、静かに歩を進める。胸元で握り締めた手のひらが汗ばんでいた。

「お、大きな音が聞こえたので心配で来てしまいました……アドルフ様、いないのですか……？」

渴いた喉から搾り出すように声を出す。すると、薄暗くて見えはしないけれど、コツンツンという足音が響いて聞こえてきた。

「アドルフ様……？」

足音の聞こえた方に目を凝らすと、奥に螺旋階段があった。奥の階段はわたしの立っている場所のように月明かりが届いていなくて、余計に暗くて見えづらい。

その足音の主がアドルフ様だと信じて疑わずに様子を伺うと、息を呑む声が聞こえた。

「っ……リリア……？」

アドルフ様よりもいくらか低い声。アドルフ様も上背があるけれど、それよりも少し体格が大きいように見える。

そしてなにより違うのは、その人に狼のような耳と尻尾があるところだった。

「……あ、あなたは……」

その影が月明かりの届くところまで歩みを進めたところで目を見開く。癖の強そうな白銀の髪とサファイアのような碧い瞳、狼のような黒い耳と尻尾――それは、いつしかわたしを助けてくれた獣人だった。

「リリア、なんでここに……っ」

その獣人はわたしを見ると狼狽えたように顔を顰めたけれど、すぐに口を吊り上げて笑った。

「まあちようどいいか……」

「きゃ……っ!？」

そしてわたしを担ぐように抱えると、再び来た階段を登っていく。

「は、離して……っ！ 離してください……!!」

こんなところをアドルフ様に見られたらどう思われるかわからないと思い、必死に肩を押して獣人との距離を取ろうとした。けれどがっしりと腰を掴まれていて、男はびくともしない。

「暴れるな。離したら怪我するのはおまえだろ」

その言葉に息を呑む。たしかに今男が歩いているのは階段で、わたしは肩の上に抱えられているから、この高さから落とされたら尻もちどころでは済まないだろう。

そう思ったわたしの視界の隅になにか違和感があつてそちらへ視線を向けると、殴ったように抉られた壁が見えた。先ほどの大きな音は、もしかしてこれだろうか？ わたしを抱える腕は、わたしの腕なんて簡単に捻ることができそうなほどがっしりとしていて、背筋に寒気が走る。

大人しくなったわたしを抱えたまま男は進んでいくと、階段の上に現れた扉の一つを開けてその奥にあるベッドの上にわたしを置いた。乱暴に投げられるかと思つたけれど意外にもその手は優しく、広いベッドの上に寝かせられると、男が覆い被さるように上からわたしを押し倒す。

「っや、やめ……んう」

それに抵抗しようと口を開くけれど、黙らせるみたいに唇を押し当てられる。唇をこじ開けるみたいに舌が入ってきて、逃げようとする舌を無理やり絡ませられた。



「っん……ふ……♡」

本当は抵抗したいのに、やわらかい舌が気持ちよくて鼻の奥に引っかかったような息が漏れてしまう。甘く舌を吸われると体の力が抜けてしまって、角度を変えて何度も深くキスされるたびにお腹の奥が熱くなった。

（あ♡ 舌吸われるの気持ちいい……わたしの好きのところ、わかってるみたい……♡ でも、やだぁ……アドルフ様以外と、こんなことしたくないのに……♡）

必死に理性を働かせようとして、深くキスしてくる男を拒否しようと胸を手で強く押した。それによりやく唇が離れると、獣人の男をキッと睨みつける。

「や、やめてください……！ わたしにはアドルフ様という大切な方がいます……その方以外とこんなことをするつもりはありません……！」

男を睨みながらそう言うけれど、男はまったく怯むことはなく、むしろ「へえ……」とどこか楽しそうに口角を上げた。それに少し狼狽えるけれど、言葉を続ける。

「だから、離して……！ アドルフ様に見られたら……！」

顔を歪ませながらそう言って思わずアドルフ様の姿を探るように視線を逸らせると、男はっ……っ♡ とわたしの首筋に指を這わせた。それにびくっ♡ と反応してしまいながら手から逃れようと身を振ると、男が「なら安心だな」と口を開く。

「俺がその『アドルフ様』だから」

続けて言われた信じられない言葉に、驚いて目を見開いた。つい「えっ!? な、なに言って……」と声を漏らすと、その男——アドルフ様と名乗る獣人の男が、わたしの両腕を頭の上でまとめた。そして自身の首元に巻かれていた白いスカーフを外すと、それでわたしの両腕を縛る。あっという間に縛られてしまった両腕に気がついたときには、もう腕を動かせなくなってしまっていた。

「体に教えてやるよ」

「や、やだ……ん♡」

首筋にちゅ♡ ちゅ♡ と吸いつかれて、そんな声を出したくはないのに甘い声が出てしまう。合わせるようにネグリジェの上から乳首の周りを円を描くように、すり♡ すり♡ と撫でられると、腰がびくっ♡ と揺れた。もう寝

るだけだったから下着はつけていなくて、焦らされるようなその動きがもどかしい。

「やあ……だめ……っ♡」

「だめって言う割には腰がへこへこ動いてるな……期待勃ちもいっしょ……ほんとエロい……」

言われた言葉にかあつと顔が熱くなる。ネグリジェを押し上げるように乳首が勃起上がっていて、それを見たくなくて目を瞑って顔を逸らした。

「なあわかる？　ここ、まだ触ってねえのにこーんなに固く勃起させてんの……縛られてんのにヨガって腰振って……リリアはほんと俺のこと煽るのうまいよ」

「んっ、ちが♡ 煽ってなんか……っ♡ ああっ♡」

ネグリジェの上から勃起上がった乳首をピンッ♡ と爪で弾かれる。言葉を続けていた途中に弾かれたことで声を抑えることもできなくて、大きな声が漏れてしまった。

「あ、も、だめ……♡ 乳首、かりかりするの……だめえ♡ あ、あっ♡」

乳首をカリカリと引っかかれて、ネグリジェの上から与えられる快感に無意識に腰が動いてしまう。そうしている間に男のもう片方の手でネグリジェの胸元のリボンが解かれて、ボタンがぷち、ぷち……♡ と外されていく。

「やつ、や……脱がさないで……♡ あ、んん……♡」

どんどん外されていくボタンから逃れたくて身を振っても、縛られた腕がスカーフに擦れるだけでどうすることもできない。ついには腰までのボタンがすべて外されて、上半身が頭になってしまう。

「はあ……リリア……」

「んっ♡ あ、やめ……んう♡」

男から熱い吐息が漏れたことにお腹の奥が熱くなる。そして今度は直接乳首をぎゅうっ♡ と摘まれて、腰がびくっ♡ と大きく跳ねた。

「っひ……う……♡ あっ♡ んう……♡」

続け様に与えられる強い快感に頭の中がびりびり痺れるのを感じていると、男がぢゅううっ♡ と曝け出された胸元を強く吸い上げる。いつもはドレスに

隠されているその部分に赤い跡が残って、それを見ると男が嬉しそうに少し口角を上げた。

「ん、は……ずっとここに跡つけたかった……」

愛おしそうな目で赤い跡をなぞるその指が優しかったから、肩で呼吸をしながら思わず男の顔をじっと見つめてしまう。見た目も、声も、性格も、全部アドルフ様とは違うように見えるのに、その優しい目はなんとなくアドルフ様を彷彿させて体が熱くなる。

男はわたしの視線に気がつく、ふ、と笑みを零した。

「なあ、信じた？ 俺がアドルフだってこと……」

突然のその問いかけに、先ほどアドルフ様を思い浮かべていたことを見破られていような気持ちになって、反射的に顔を逸らす。

「わ、わからない、です……」

焦ってそう言う、もう一度男から笑いが漏れた声が聞こえた。

「そうだよな。大丈夫、まだまだちゃんと気持ちよくしてやるから……」

「っん♡ あ、う……っ♡」

男がそう言うなりわたしの乳首を口に含んで、飴玉を舐めるみたいに舌で転がす。れろれろ♡と舐められて、時々甘噛みするように歯で乳首を軽く噛まれると、頭の中がびりびりと痺れて背を仰け反らせてしまう。

「や、やあ……♡ それ、やめっ……んう……♡♡♡」

「っはは……んなエロい声出してやだやだ言っても、煽ってるようにしか見えねえって……ずっと触ってほしそうに動かしてるこっちも触ってやろうな……」

「ん、あ、待っ……♡ ああ♡」

男の手がネグリジェの下のショーツに伸びたことに嫌な予感がして身を振ったけれど、呆気なくショーツを取られておまんこに触れられてしまう。ぬちゅ……♡と水音が響いて、恥ずかしさにカッと顔が熱くなった。

「はあ……ところどころ……なあ、こういうのも好きなの……？　すげえエロい……」

「や、あ……やだあ……♡」

わざと水音を響かせるように、くちゅ♡ くちゅ♡ とおまんこに指を埋められて、恥ずかしさに顔から火が出そうだった。

その指が愛液を塗り広げるようにクリトリスまで滑っていくと、固く勃起上がったクリトリスをちゅこちゅ♡ と上下に擦られる。

「あ、んぐ♡ だ、だめ……♡ だめです、それっ……♡ あ、あっ♡」  
「大丈夫。リリアの勃起クリ、こうやってちんぽみたいにしこしこしたら、すげえ気持ちよくなれるから……」

言われた卑猥な言葉に体が熱くなる。ちゅこちゅ♡ と上下に擦る動きが、まるでおちんぽにするような動きだと思うと、余計に体が熱くなっていた。ずっとなんとか抑えようと思っていた絶頂感を強制的に昇り詰めさせるような動きに、目の奥がばちばちする。

「ひっ……ぐ♡ も、やめ……あっ♡ イっちゃ……イっちゃう、からあ……っ♡ めめめ♡♡♡」

首を横に振って訴えても、その動きは止まるどころか速さを増していつて、絶頂感がどんどん昇ってくる。





男の言葉に少し目線を動かしてそちらを見ると、おまんこ越しに男の碧い瞳と目があつて、おまんこの奥が熱くなつた。ひくひく♡と主張するように動くクリトリスを口に含むと、男がぢゆるるるる♡と吸い上げる。

「あ、あっ♡  
うづっ♡  
んう……♡♡♡」

う……♡ まだイったばかりだから我慢もできない♡ もうだめ、すぐイっちゃう……♡♡)

男がクリトリスを口に含んで、じゅぽじゅぽ♡ と上下に舌で擦ると、おまんのこの向こうで男の頭が動くのが見える。それが男の口で気持ちよくさせられているというのを突きつけられているようで、恥ずかしいのとは反対にどんどん息が上がっていった。

「ぎっ……♡ イっ、イクイクイク……っ♡ あっ、ん……♡♡」

絶頂感を迎えると同時に、しゅっしゅっ♡ と潮が吹き出す。男が足から手を離してそつとベッドの上に下ろされると、足がびくびく♡ と痙攣しているのがわかった。

は……♡ は……♡ と息も絶え絶えに快感の余韻を感じていると、おまんこに固くて火傷しそうな熱が擦りつけられているのを感じる。

「はあ……リリア、もう我慢できねえ……」

いつのまにか服を脱いでいた男の極太おちんぽがおまんこに擦りつけられていて、ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ と音を立てている。その甘い快感にビクッ♡ ビクッ♡ と腰が揺れて、だめだと思うのに体が言うことを聞いてくれず、おまんこの入口が待ちきれないというようにヒクついていた。

「ん、待っ……♡ あ、ああんっ♡」

ずりゅりゅりゅりゅっ♡

入口に宛てがわれると、おちんぽで一気に奥までこじ開けられて目の奥がばちばちとした。とろとろの内壁が擦れておちんぽで一気に奥まで突かれると、

こりゅっ♡ こりゅっ♡ と降りてきた子宮口におちんぽが当たる感覚がする。

「あ、あぁっ♡ ん、ひ……っ♡ や、あ、あっ……♡」

「はあ……リリアん中入れるの……今日一日ずっと我慢してたから……すげえ気持ちいい……♡」

ずちゅっ♡ ずちゅっ♡

腰を引かれて奥まで突かれるたびに、おまんこの浅いざらざらしたところを擦ってから子宮口を突かれて、頭が快感で真っ白になる。息をするために開いた口からはもう甘えただらしない声しか出なくて、すでにとろとろのおまんこからは止め処なく愛液が溢れてきていた。

「リリア……リリア、愛してる……かわいい俺のリリア……♡」

「んっ……あっ♡ うう……っ♡ ああんっ♡ っっっ♡♡」

激しいピストンにもう気持ちいいということしか考えられなくて、いき続けたみたいで頭の中がふわふわとしていた。ぷしっ♡ ぷしゅっ♡ と奥を突

